

「いつまで寝てるんだ。もうとっくに焼き上がってるぞ。」
朝起きていくと、いきなり親父に怒鳴られた。

うちは、パン屋で朝が早い。昨夜は、バンドの練習について熱が入ってしまった。なにしろ家に帰ったのは十二時をまわっていたほどだった。何となく頭が重い。定時制高校の四年生になるおれは、親父から卒業したら家業のパン屋を継げと最近特にうるさく言われている。まったくその気がないわけではないが、おれにはロックバンドで有名になりたいという夢があるし、今のおれにとって高校の仲間と組んでいるバンドでロックをやっているときが一番幸せなときだった。おれは、来月開かれるライブコンサートのことで頭がいっぱいだ。練習では、感じがいまひとつしっくりこなかったが、昨夜は仲間の息があって音にもかなり迫力が出てきた。それで、つい遅くまで練習がのびてしまった。

親父は、なおも不機嫌そうな顔でにらんでいたがおれは黙って焼き上がったパンをケースに移していった。

仕事が一段落して、朝食を取りに奥の部屋に行った。食事をしながら親父が言った。

「お前も来年は卒業だ。いつまでもチャラチャラしてないで、少しは身を入れてパン屋の修行をしてみろ。バンドなんぞいくらやったってめしが食えるわけじゃないだろう。それに、ひとり息子のお前が跡を継いでくれなかったらだれがこの店をやるんだ。おれが頑張ってることまでにしたのにもったいねえじゃねえか。近所の人たちがお前のことなんて言ってるか知ってるか。パン屋のドラ息子はいかれたかっこして……。」

「うるせえなあ。どんなかっこしようも勝手だろ。毎日、毎日、朝から粉こねくりまわして人が食うパン焼いて何がおもしろえんだよう。」

「この野郎。人並みの苦勞もしてねえくせに、お前に何がわかるっていうんだ。」
そこへ母が割ってはいるのがいつものパターンだ。

「まあまあ、お父さんもそんなに怒らないで。店にも聞こえますよ。新一もそのうちに分かりますよ。」

「だって、お前……。」
おれは、朝食もそこそこにさっさと店へ行ってしまった。親父は初めこそ冷静に話しているが、話しているうちにだんだん興奮してきて最後は文句ばかりが口をついて出てくる。

親父の気持ちも分からないではない。店は商店街の外れで立地条件はよくないが、親父の腕と努力で駅前のパン屋より繁盛している。わざわざ遠回りをして来てくれる客もけっこういる。

おれに跡を継がせたいという親父の気持ちも分からないでもない。でも、おれは今ロックのことで頭がいっぱいだ。ちっほけではあるがライブハウスのステージに立ってスポットライトを浴びる。みんなが、おれたちに向かって拍手をしてくれる。一度味わったら忘れられない快感だ。それに比べたらパン屋は、朝早くから粉を練って夜遅くまで店で売って、その後で帳簿もつけなければならぬ。だから注目してもらえないし、拍手もない。一度しかない人生だ。やりたいことをやった方がい

いに決まっている。そう考えるとパン屋の修行には身が入らなかった。

ある日、店番をしていると常連客の長谷川さんが来た。この人は朝早く来て、会社で食べる昼食のサンドウィッチやおかずパンを買っていく。今日はいつもよりかなり遅い。

「いらっしやい。今日は、会社は休みですか。」

「ええ、まあね。……クリームパン一つください。」

「はい承知しました。一つでいいんですか。」

「うん。一つでいいよ。じいさんに持たせてやるんだから。」

「おじいちゃん、いかがですか。入院してるって聞きましたけど。」

「うん……それが今朝早く、死んじゃってね。」

「えっ、それは……。寝たきりになられる前は、散歩のついでによくパンを買ってもらったんですよ。」

「お宅のクリームパンが好きでねえ。寝たきりになって食欲が全然ないときでもクリームパンだけは、少しは食べたんですよ。いつかお宅が休みでよそのクリームパンを買っていったら、ひとくち食べていらないうって言うんですよ。じいさんは若いころ板前をやっていたので、味にはうるさくってね。わかるんだねえ、本物っていうのは。」

クリームパンはうちの商品のなかでも最も売れているひとつだ。いつも夕方までには売り切れていた。親父が工夫して作った秘伝の香料を入れて、精選した卵黄だけで作っていた。近所でも評判がよかった。

「先月から、老衰で入院して点滴とチューブで流動食を流し込んでいたんですよ。時々クリームパンが食べたいうって言ってたんですよ。でも、ついに食べさせてやれなかった。それで、今日一つ持たせてやろうと思ってるんですよ。」

「それはどうも。ありがとうございます。だったらこれは、おじいちゃんにあげてください。」と言って、たった百円ではあるが代金はもらわなかった。親父のパンをそんなに思っている人がいるとは、考えてもみなかった。

その夜、今朝の出来事——親父のパンを冥土めいどの土産にする人がいること——が頭にこびりついて、おれは、なかなか眠れなかった。目をとじると子供のころのことが思い出されてきた。毎日、売れ残ったパンばかり朝昼晩、食べさせられた。お金がなくて母は近所の工場へパートに出ていたこともあった。親父は朝早くから粉と汗にまみれて、何種類もの粉や香料を混ぜ合わせていくつものパンを作っていた。焼き上がったたぐさんのパンを少しずつつまんでノートにつけながら、ときにはひとくち食べてパンを床にたたきつけて、下を向いたままじっと動かないこともあった。試作品のパンがゴミ箱に捨てられ、もったいないことをするパン屋だと陰口をたたかれることもあった。近所にスーパーマーケットが開店したときには、何週間もほとんど売れない日が続いた。一つも売れない日もあった。さすがの親父もかなりこたえているようだった。そんなころのことだ。ある晩、いきなり

「おい、起きろ。これ食べてみる。」

と、親父が勢い込んでパンを寝ているおれとおふくろの顔の前につきつけた。それがクリームパンだった。

「なんですか、こんな夜中に。何時だと思ってるんですか。」
おふくろは、ぶつぶつ文句を言っていたが、親父はおふくろの言葉もうわのそらで、

「ついでにできたぞ。うん。どうだ。」
と言って、ひとりでうなずきながら悦えつに入っていた。確かにこれまでのパンとは、ひと味違っているのが子供のおれにもわかった。それから、少しずつ売り上げも伸びていき、親父はますますパンの味の改良に没頭するようになっていった。たかがパンではあるが、その中には親父が追い求めているパン作りにかける情熱が込められていた。お客さんが、うまかったと言って満足してくれる。親父は、それが楽しみで頑張っていたんだ。それを長谷川さんのおじいさんはわかっていた。パンを買って行きながらよく「このパンはうまいね。特にクリームパンはいい味出してるね。」と言ってくれた。おれはお決まりのあいさつぐらいにしか思っていなかったが、今思うとあのおじいさんは、うちのクリームパンの味を本当に分かってくれていたんだ。

パン作りというあまり目立たない仕事でも、地道に一生懸命打ち込めばきつとだれかがわかってくれるということをおじいさんが教えてくれた。おれは、人に注目してもらえぬ派手なことばかりに気を取られていたが、親父みたいな生き方も悪くはないと思いはじめた。

次の日、おれはいつもより早く起きた。親父はこれから仕事を始めるところだった。

「どうしたんだお前。こんなに早く。」

「ああ、ちよっと手伝おうと思っただけ。」

「どういう風の吹き回しだい。粉でも練ろうってえのかい。」

「ああ、少しはまじめにやってみようかなと思っただけ。」

「へえ。バンドとかいうのは、どうすんでえ。」

「おれ、バンドをやめるつもりはないけど、……」

と、言っておれは、昨日の長谷川さんのおじいさんの話をした。

「うれしいね。職人冥利みょうりにつきるぜ。いい仕事をすりゃあ、きつと世間様が認めてくれるんだ。なあ、新一。どうだ、今日は、ひとつお前がパンを作ってみねえか。それで、なんとかサマになったらそのパンをおじいさんとこに届けてやれ。昨日のパンを持って天国に行ってもらおうわけにゃあいかねえだろう。」
「でも、おれにできるか。」

「何言ってるんだい。おれと同じパンを作れって言ってるじゃねえや。そう簡単に同じ味を出されてたまるかい。お前が、心をこめておじいさんのために作ってみろ。なあ、新一、どうだ。」

「うん。じゃあ、やってみるか。」
親父の言葉を聞いて、おれもその気になった。だが実際にやってみるとすぐに親父に怒鳴られた。

「違う、違う。混ぜる粉の量が違うじゃねえか。パンによって違うのが、まだわかんねえのか。」
練るときも、形を作るときも、焼くときも叱られた。結局ほとんど親父が作った。そのパンを長谷川さんの家に届けたが、いつの日か自分なりのパンを作れるようになろうと心に誓った。